

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K01081

研究課題名(和文) 中世初期ポー河デルタ近隣における集落間の社会経済的関係の解明

研究課題名(英文) Socio-economic relationships between settlements of the early medieval Po River delta.

研究代表者

城戸 照子(KIDO, Teruko)

大分大学・経済学部・教授

研究者番号：10212169

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：(1) コマッキオは10世紀前半にヴェネツィアとの抗争に敗れ、一度は地中海商業の「結節点」の地位を失う。その後、製塩と養魚場をもとに再定住が進み、デルタ地帯の在地経済を支える小都市として持続可能な成長を遂げた。ヴェネツィアの商業機能とはすみわけて共存した。(2) ラヴェンナ大司教とポンポーザ修道院は、第一には所領経営に基盤を置く農村領主だが、前者は11世紀以降、製塩地チエルヴィアとその塩商業に関心をもち支配下に置いた。(3) イタリア半島東側のアドリア海沿岸部は「non-Frankish World」「非フランク的世界」であり、その地の小定住地はビザンツ帝国の政治的・社会経済圏の影響を受ける。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果は、2000年代以降のヨーロッパ歴史学界の研究動向に基づく。研究代表者は、重要な研究動向を以下3点と考え、新しい分析視角を提示した。成果物の発表には、学術的意義がある。(1) 考古学的発掘資料の増加と公開(Webサイトでの閲覧可能性も向上)により、定住史研究(都市-農村関係を含む)が飛躍的に進んだ。(2) 21世紀には旧東欧諸国の歴史がイタリア半島史と接合され、とりわけイタリア半島東側のアドリア海沿岸地域の歴史が注目されている。(3) 森林や沼沢地、干潟といった非耕作地(特に小麦などの穀物栽培ができない土壌)が、農村全体のいわばエコシステムに組み込まれて均衡を保っている。

研究成果の概要(英文)：(1) Comacchio lost its status as a 'nodal point' of Mediterranean commerce once it was defeated in a struggle with Venice in the first half of the 10th century. It was later resettled on the basis of saltworks and fish farms, and achieved sustainable growth as a small city supporting the local economy of the delta region, up to the present day. It coexisted with the international commercial function of Venice. (2) The Archbishop of Ravenna and the Abbey of Pomposa were first and foremost rural lords based on the management of their estates, but the former was interested in and controlled the saltworks of Cervia and its salt commerce from the 11th century onwards. (3) The Adriatic coast on the eastern side of the Italian peninsula was originally 'non-Frankish World', and the small settlements there were still influenced by the political and socio-economic sphere of the Byzantine Empire.

研究分野：初期中世イタリア社会経済史

キーワード：コマッキオ ラヴェンナ大司教 製塩 塩商業 アドリア海沿岸部

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究開始当初の研究動向として、研究代表者は以下3点に注目していた。ヴェネツィアを中心として、紀元1000年以前の西アドリア海(イタリア半島東沿岸部)の干潟・湿地帯の定住地の考古学的発掘が進み、研究成果が多く公開され、文献史料に加えて新しい分析視角が提示されていた。② M.McCormickによる2001年刊行の *Origins of the European Economy* や Ch.Wickhamの2005年刊行の *Framing the Early Middle Ages* のように、初期中世の地中海世界(ブリテン諸島と北欧、北アフリカ、ビザンツ帝国も包摂する)を舞台とした総合的な商業史が構想されていた。西アドリア海の沿岸地帯を中心とする農村史については、1990年代以降のポローニャ学派の Langobardia (イタリア北西部でランゴバルド王国とフランク・カロリング政権の影響が強かった地域)と Romania (イタリア北東部でフランク・カロリング政権の影響が弱くビザンツ帝国の政治的影響が残っていた地域)という対比的な地域枠組みが受け入れられていた。農村史では、1980年代末からポローニャ大学の研究者を中心に、イタリア北東部のアドリア海沿岸について、湿地帯や湖沼地、森林も含め穀物栽培ではない「未耕地」の経済活動の重要性が、環境史の文脈で強調された。

(2) 上記の研究動向から研究代表者は、以下の3点の問題関心を持った。古代末期から中世初期に継続していた製塩と塩商業について、西アドリア海(イタリア半島東沿岸部)に点在する製塩地キオツジャ・コマッキオ・チェルヴィアについて、在地での経済機能と相互関係から沿岸部経済のネットワークが検証されないか。② 文献史料とあわせ考古学の発掘成果から明らかになってきたこうした小定住地、特に初期中世におけるコマッキオの重要性を考察する必要がある。文献史料に言及のある、コマッキオ住民がポー川水系をヴェネツィア住民と同じく航行することで、ランゴバルド王国及びカロリング政権下の Regnum Italiae (イタリア王国)と西アドリア海(イタリア半島東沿岸部)が結びついていたという仮説は、検証できるか。

2. 研究の目的

1-(1)の研究動向から、研究代表者は西アドリア海(イタリア半島東沿岸部)の沿岸地域の交易ネットワークの存在の解明を研究目的とした。そのため、以下3点のアプローチを考えた。

古代末期から文献史料に言及のある「塩」を取り上げ、商品というより領主へ納付する現物の賦課租として農村の史料にも現れる「塩」の需要と供給を明らかにして、沿岸部製塩地と内陸農村地のつながりを検証する。② キオツジャとコマッキオは、初期中世にはもっと自律的ながら、のちにヴェネツィアを核とするネットワークに組み込まれる(特にコマッキオは932年の戦闘後、住民がヴェネツィアに連行される)が、初期中世には別の形でネットワークがありえたのではないかと検討する。ラヴェンナ大司教の政治的支配領域に帰属するチェルヴィアは、教会領主の経営地として取り上げられるのではないかと。また、同じく教会領主として中世の経済活動の主体となる、ポッピオ修道院(ポー川航行による流通を想定)ポンプーザ修道院は、重要な在地領主として注目できる。自律的小定住地の変遷と持続可能な成長のために、領主の政治権力がどのように関連するか、考察する。

3. 研究の方法

研究方法として、(1)文献史料の検索と(2)近年の考古学的発掘資料の公開・分析の報告書の検索と閲読を考えた。(1)については、特にスポレートの中世研究イタリアセンターが刊行中の《Atti dei Congressi》『国際学会報告論文集』(AC)のシリーズを大分大学図書館に収蔵の上、閲読に取りかかった。政治史の枠組みでは、カロリング国家やコムエネ及び都市共和国の成立に結び付かない、ビザンツ-ランゴバルド-イスラームの中世イタリア半島と政治的支配構造に関連する、変遷をたどる必要があった。(2)については、現地博物館(コマッキオ Museo Delta Antico ;ラヴェンナ Museo Nazionale di Ravenna, Classis Ravenna, Museo della Città e dTerritorio)の巡見とカタログの購入、文献検索などを実施した。最終研究年度では、コマッキオの発掘成果から沿岸部でのガラス工芸・ガラス手工業に特に注目したため、モザイクの素材テッセラ(彩色小ガラス片・金箔を挟んだ小ガラス片)に注目し、RavennaとClasse(ローマ期の海岸線が後退し平地となっているラヴェンナ市郊外)のバシリカ建築様式の聖堂内部のモザイクを巡見した。また、ガラス工芸技術に関する文献を購入した。

なお、Covid19の感染症拡大防止対策により現地に行けない時期には、上述の『国際学会報告論文集』の閲読とともに、中世イタリアに関する学術研究誌『中世考古学』《Archeologia Medievale》所収論文の検索を中心に、研究動向を追跡した。

4. 研究成果

(1) 研究成果物として、以下3点がある。 初期中世の集落コマッキオは、9-10世紀にヴェネツィアとの競合には敗れたが、むしろ相互補完的な活動をするポー川河口の在地の小都市(フェラーラ領)として、現代にいたる姿を残しているのを「小都市の持続可能性 ポー川デルタ地帯のコマッキオ集落」『イタリア史のフロンティア』(イタリア史研究会編、昭和堂、pp.17-31)で示した。② 塩の供給と中世食文化史の関係では、でポッピオ修道院のマントヴァ船着き場へのコマッキオ住民の塩の搬入(本院ではなく船着き場での現物支払いで、ポー川支流のミンチョ川を遡航するとガルダ湖畔の養魚場のある所領に至る)が確認される。魚の塩漬けなどの加工に必要な塩が供給されていることが想定できた。ポー川河口の汽水地域のウナギを食材とする文化については、四旬節の精進料理としてのウナギ・パイを「頭と舌で味わう中世の食文化：レクチャー編」『西洋中世研究』(15号、2023年、pp.151-159)で紹介することができた。 考古学分野での短い紹介として、「考古アカデミックレポート：初期中世歴史研究についてのイタリア考古学の重要性」『考古学ジャーナル』2023年7月号。コマッキオの発掘の重要性を紹介した。

(2) 今後成果物をまとめる予定の、以下4点の知見を得た。 教会領主としては、10世紀以降のポンポーザ修道院の農村所領経営が重要である。そこでは、コマッキオの製塩地との関係は薄い。ポンポーザ修道院は当時、干潟に浮かぶ小島に位置していたため、修道院全体の内陸部所領の農村経営を考える必要がある。② コマッキオの発掘からは貨幣の発掘がなく、常に活発な交換の結節点だったという位置づけには限界があると見直されている。その一方でガラス工芸などの手工業跡が発掘され、むしろ手工業の小集落として栄え、司教座聖堂ももった定住地として評価されている。 のちにヴェネツィア領となる中世都市ラヴェンナと関係する製塩地は、チェルヴィアであり、とりわけ10世紀以降のラヴェンナ大司教との関係が強い。 研究対象の西アドリア海(イタリア半島東沿岸部)はかつてビザンツ文化圏に属し、政治的には“non-Frankish World”「非フランク的世界」に明確に位置づけて再考すべきである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 城戸 照子	4. 巻 784
2. 論文標題 初期中世歴史研究にとってのイタリア考古学の重要性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 38-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 城戸 照子	4. 巻 15
2. 論文標題 パンがないなら.....トルタを食べればいいじゃない？ それともお粥？	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 西洋中世学会	6. 最初と最後の頁 151-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 城戸照子
2. 発表標題 「頭と舌で味う中世の食文化：レクチャー編第4報告 中世イタリア半島の食文化_トルタが食べたい・・・」
3. 学会等名 西洋中世学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 イタリア史研究会編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 352
3. 書名 イタリア史のフロンティア（共著）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------